

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520724

研究課題名（和文） 桑原隲蔵『中等東洋史』の中国語訳本に関する調査と
テキストの比較研究研究課題名（英文） An Investigation of the Chinese Translations of Jitsuzo Kuwabara 's
Secondary Oriental History Textbook and a Comparative Study of
the Texts

研究代表者

黄東蘭 (HUANG DONGLAN)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00315871

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期日本の代表的な東洋史教科書である桑原隲蔵の『中等東洋史』の漢訳本を可能な限り調査・収集し、桑原東洋史の歴史叙述の特徴を考察したうえで、原著とその漢訳本との比較分析を通じて、日本の「東洋史」がなぜ清末期の中国で「中国史」と見なされ、どのような翻訳・改編を経て「中国史」になったかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the Chinese translations of Jitsuzo Kuwabara's Secondary Oriental History Textbook, which was a typical textbook of Oriental history in the Meiji Era. By surveying the characteristics of historical description in Kuwabara's Oriental history and analyzing Kuwabara's original book and its Chinese translations, the research examines why Meiji Japan's "Oriental history" was regarded as "Chinese history" in late Imperial China and how the original book was translated and revised into "Chinese history".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：桑原隲蔵、東アジア史、漢訳諸版本、テキスト比較

1. 研究開始当初の背景

清朝末期の中国では、「新政」改革の一環として多くの新式学堂が設立され、歴史は小学堂から順次学ぶ重要な科目と位置づけられた。しかし、二十四史を始めとする中国の

伝統的な史書は分量・内容ともに教科書として適していないため、新しい体裁の教科書が必要とされた。そこで、急場をしのぐものとして、明治期日本の支那史・東洋史教科書が翻訳・改編され、一部の地域で中国史教科書

として使用されていた。なかでは、桑原隲蔵の『中等東洋史』（中学校の東洋史教科書、大日本図書、1898年）は複数の漢訳本、改編本が刊行されるほど知名度が高かった。先行研究では、桑原の東洋史教科書は日本のアカデミズム東洋史成立の一里塚として高く評価され、その漢訳本に関しては、主に日本国内に所蔵されたものを中心に史料紹介がなされた。しかし、桑原の東洋史教科書とその複数の漢訳本とのテキスト分析がなされていないため、桑原の東洋史教科書に代表される明治期日本の「東洋史」がなぜ清末期の中国で「中国史」と見なされ、あるいは「東洋史」を中国人向けの教科書として相応しい「中国史」にするためにどのような改編がなされたか、などの課題が残されている。

2. 研究の目的

(1) 『中等東洋史』を始めとする桑原の東洋史教科書の異なる版本を網羅的に調査・収集し、諸版本の比較を通じて体裁や記述の変化について考察し、明治期日本の中国史関連の教科書（支那史・東洋史）における桑原東洋史の歴史叙述の特徴を考察する。

(2) 桑原の東洋史教科書の漢訳本を網羅的に調査・収集し、それぞれの訳本が依拠した原書の版本を突き止め、個々の漢訳本と原書とを比較し、体裁、時代区分、具体的な人物や事件に関する記述の異同を考察し、明治期日本の「東洋史」が清末期中国の「中国史」に翻訳・改編されたプロセスを解明することである。

(3) 桑原の東洋史教科書とその漢訳諸版本との比較分析を通じて、両者の歴史叙述、およびそれに附随する歴史意識について考察することである。

3. 研究の方法

(1) 国立国会図書館、京都大学文学部附属図書館桑原文庫、東書文庫、東京都立中央図書館実藤文庫、中国国家図書館、南京図書館、上海図書館などでの資料調査を通じて、桑原の東洋史教科書とその改訂本・漢訳本を網羅的に調査し、合わせて明治期に出版された支那史・東洋史教科書、清末期に翻訳・刊行された日本の支那史・東洋史著作や中国人が編纂した中国史の教科書についても可能な限り調査した。

(2) 以上の資料調査を踏まえて、桑原の東洋史教科書と同時代の支那史・東洋史教科書とを比較し、その歴史叙述の特徴について考察した。

(3) 桑原の東洋史教科書とその漢訳諸版本とを比較し、体裁、内容、および具体的な史実をめぐる記述を分析し、それぞれの歴史叙

述の特徴や歴史意識の異同について検討した。

4. 研究成果

(1) 各年度の資料調査により、これまでに知られていない清朝政府の教科書審査用の稿本も含めて、『中等東洋史』やその改訂版である『初等東洋史』（大日本図書、1899年）、『新編東洋史教科書』（開成館編輯所、1899年）など桑原が執筆した東洋史教科書を底本とする桑原東洋史教科書の漢訳諸版本を可能な限り入手した。

① 樊炳清訳『東洋史要』（東文学社、1899年）とその五つの異なる刻本（1899年から1903年までに刊行）。

② 陳慶年編『中国歴史教科書』（1903年序）および1909年商務印書館修正本、1912年商務印書館増訂本。

③ 周同愈訳『中等東洋史教科書』（文明書局、1904年）。

④ 泰東同文局友某訳『東亜史課本』（泰東同文書局、1904年）。

⑤ 金為訳述『中学堂教科書 東洋史要』（商務印書館、1908年初版から1914年第7版まで）。

⑥ 陸鑿訳『東亜史要』（編訳処編、学校司排印局校印、光緒年間）。

⑦ 『歴史課程 東洋史要』（張仁侃閱、稿本、清末期）。

(2) 桑原『中等東洋史』とその改訂版である『初等東洋史』（1899年）以降の桑原東洋史教科書の諸版本とを比較し、時代区分や「東洋」範囲の推移について考察し、桑原の『中等東洋史』に盛り込まれた「知」はそれに先だって出版された東洋史教科書の成果を吸収し発展させたものであり、民族／人種間の勢力消長を通じて歴史を把握しようとする桑原の歴史叙述は、日清戦争後中国大陆への勢力膨張を背景とする日本の学術知を象徴するものであった（雑誌論文①）。

(3) 明治期日本の支那史・東洋史教科書の中国叙述における桑原『中等東洋史』の歴史叙述の特徴について考察し、以下のことを指摘した。すなわち、田口卯吉『支那開化小史』や那珂通世『支那通史』などの支那史書物と同様に、桑原の『中等東洋史』も江戸時代の漢学教育の流れを受け継いでいる。しかし、支那史が中国史上の王朝交替のほか、西洋の文明史観の影響を受けて、中国の文化や社会風俗の変化にも関心を示したのに対して、桑原の『中等東洋史』は、歴史におけるネーションの役割を重視するランケ史学の影響を受けて、中国の歴史を東洋史、すなわち「東方亜細亜」（日本を除く）の歴史の一部分と位置づけ、漢族と周辺諸民族との対立・競争に重きをおいた点、歴史を進歩や停滞、後退

の過程ととらえない点ではそれまでの支那史と異なる(雑誌論文②、学会発表①、③)。(4) 桑原『中等東洋史』の改訂版である『初等東洋史』(1899年)と『東洋史教科書』(1903年)の漢訳本である『東亜史課本』とを比較し、「支那」や「中国」という表現の翻訳と改変、同時代史に関する記述(台湾事件、甲申事変、日清戦争)の書き換えについて考察し、原著と訳本の記述のズレについて検討し、以下のことを指摘した。すなわち、桑原の教科書では、中国に対する一般的な呼称として「支那」という語が使われる一方で、中国の伝統的な華夷観念に由来した「中国」という語も使われている。訳者は中国人の立場から両者をすべて「中国」と表記したことで「支那」という語を回避したが、原著の「中国」に表された桑原の華夷意識をも消してしまった。また、台湾出兵や日清戦争などの関連記述に見られる明治政府の対外政策を正当化する桑原の歴史叙述とそれに対する訳者の書き換えは、日中両国の国家間の対立を背景とするナショナル・ヒストリーの対立を端的に現している(雑誌論文③)。

(5) 『中等東洋史』と樊炳清訳『東洋史要』、樊訳本を底本とする陳慶年『中国歴史教科書』、および清朝政府学部の教科書審査意見に基づいた陳著の訂正版とを比較し、以下の結論に至った。すなわち、桑原原著の歴史叙述は、章節体や民族勢力の消長に基づいた時代区分、および神武紀年の採用など、「春秋の筆法」に象徴される儒家の歴史叙述と大きく異なる。しかし、原著が中国歴代の正史を主な史料としており、中国史が圧倒的に多くの分量を占めていること、桑原の「東洋」が華夷秩序下の「中国」(「内部」と「外藩」からなる)と空間的に重なること、原著の民族叙述が中国歴代の正史が描いた「一治一乱」の王朝交替の構図と重なるなど、桑原の歴史叙述と儒家の伝統的な歴史叙述との間に共通する部分も少なからず存在する。それゆえ、桑原の東洋史教科書(および同時代日本のその他の支那史・東洋史教科書)は清末期の中国で「東洋史」と見なされ、また、儒家の「春秋の筆法」を用いて「中国史」に書き換えられたのである(雑誌論文④、学会発表②、④)。

以上の成果は国内外のシンポジウムや学会で発表し、編著、雑誌論文および学会発表の形で公表した。

なお、本研究で行った史料調査やテキスト分析から得た知見は、近代日本の中国認識を考察するための重要な研究蓄積となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 黄東蘭、桑原隲蔵東洋史教科書とその漢訳テキスト——『東亜史課本』との比較分析を中心に、愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)第43号、2011年、pp.61-82.
- ② 연구논문、중국에는 역사가 없는가? — 지나사, 동양사에서 중국사에 이르기까지, 개념과 소통 제8호(2011)、pp.123-181 (黄東蘭、吾国無史乎? ——從支那史、東洋史到中国史、『東亜近代知識與制度的形成』国際シンポジウム(2011年11月4-5日、於中国・南京大学) 提出論文の韓国語訳)。
- ③ 黄東蘭、書写中国——明治時期日本支那史・東洋史教科書的中国叙述、黄東蘭編『再生産的近代知識』、新史学第四号、北京：中華書局、2010年、pp.123-154.
- ④ 黄東蘭、東洋史の時空——桑原隲蔵『中等東洋史』に関する一考察、愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)第42号、2010年、pp.143-165.

〔学会発表〕(計4件)

- ① 黄東蘭、吾国無史乎? ——從支那史、東洋史到中国史、「東亜近代知識與制度的形成」国際シンポジウム、2011年11月4-5日、於中国・南京大学。『東亜近代知識與制度的形成』国際シンポジウム論文集 pp.51-70.
- ② 黄東蘭、東洋史のなかの「東洋」概念——日中両国の東洋史教科書を通して、東アジア歴史学会2011年度第16回研究大会、2011年6月18日、専修大学.
- ③ 黄東蘭、「東洋史」から「中国史」へ——桑原隲蔵『中等東洋史』の漢訳テキストを通して、アジア教育史学会2010年度例会、2011年1月29日、国士舘大学.
- ④ 黄東蘭、作為近代知識的時間与空間——以中日両国の東洋史教科書為中心、「概念与記憶——中国人文科学研究的新動向」シンポジウム、中国・南京大学、2010年1月27日.

〔図書〕(計1件)

黄東蘭(編)、再生産的近代知識(上記雑誌論文②を収録)、『新史学』第四卷、北京：

中華書局、2010年（239頁）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黃東蘭 (HUANG DONGLAN)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00315871